

# チャレンジャーズライブ 手記

助教 高橋 賢一郎

チャレンジャーズライブの存在を知ったのは、私が心臓血管外科医となった最初の年でした。

年に一度、全国から心臓血管外科医の若手が集結して、血管吻合の技術を競い、高名な先生方がその所作を評価する。チャレンジャーズライブとは、若手にとって登竜門となる心臓血管外科医のコンテストと言えます。

ライブにおいて、主催する学会から参加者に与えられた試練は、豚の心臓を用いた「冠動脈吻合」です。心臓の表面を走る 3mm 程度の冠動脈に、グラフトと呼ばれる心臓外の血管を縫い付ける、いわゆる冠動脈バイパス術の手技を習得しなければなりません。このチャレンジャーズライブを知ってすぐに、私は 20 万円ほどの冠動脈用のマイクロ持針器と鑷子（ピンセット）を買いました。そんな私に、当時心臓血管外科の主任教授であり冠動脈バイパス術の大家である落先生は、以前御自身で使われていた冠動脈用の拡大鏡を授けてくれました。今から 3 年前のことでした。

大学病院の外科医は若いうちにあちこちの病院で働いて回ります。私も毎年勤務する病院を移って、それぞれの施設で修練を積みました。外科医の技術は若いうちの鍛錬が肝心で、どこの施設でも上司は私を熱く指導してくれました。始めは皮膚を切ったり糸を結んだりすることもままならない駆け出しが、3 年かけて心臓の手術を完遂するまでに成長することができました。その過程で、手術が巧い外科医は、常に安定して自分の技術を発揮する外科医であるとわかりました。「神の手」と呼ばれる外科医がいるとしたら、とんでもない離れ業を披露するのではなく、どんなに厳しい状況でもいつもと変わらない手術を淡々とこなすのだと思います。そんな外科医をイメージして、手術に、日常診療に携わってきました。

2014 年末のチャレンジャーズライブに照準を合わせて、夏頃から訓練を開始しました。当初は散々たるもので、人工の疑似血管モデルを使って吻合の練習

をするのですが、20分かけてもまともに1本の吻合もできない状態からのスタートでした。それほど冠動脈吻合は奥が深いことを、身を以て知りました。

落先生に指導を仰ぐことができたのは、夏の終わり頃からでした。業務の合間を縫って、落先生が理事長を務める川崎の病院へ行き、夜遅くまで熱烈指導を受けました。「まだまだ道具に感覚が伝わってない！毎日やらないと巧くなんかならない！」「自分は絶対にベストの運針をするんだという姿勢を常に意識しろ！」と、毎回こてんぱんにされるのですが、確かに自分の技術が上がっていく実感を、今でも鮮明に覚えています。技術を身につけたい一心で多い時期は週に1度のペースで通い、落先生はいつも厳しい指導で私を迎えてくれました。同時に、「毎日やる」ということにこだわり、一時期は1日に2吻合必ず練習するという習慣を遵守しました。そのうちに、10分あれば満足のいく吻合を完成させることができるようになりました。

そうして迎えた最初の関門は、10月26日チャレンジャーズライブ東京予選、同世代の心臓血管外科医40人との勝負でした。このとき、他の参加者がどの程度の技量なのかは、あまり気になりませんでした。自分の力を最大限発揮することだけで、他にやるべきことは無いと考えていました。

審査員の先生方や他の参加者に見つめられながら、私の吻合が始まりました。最初の3針は手が震えてまるで他人の手のようにでしたが、リズムを取り戻すのに時間はかかりませんでした。適度に脱力し、何も考えずに1針1針縫い進めていく私の手は、繰り返してきた作法に導かれるように動いてくれました。終わってみれば、それまでで一番質の高い吻合ができていたように思います。結果は、東京予選1位通過でした。

12月13日、チャレンジャーズライブ決勝が冠疾患学会総会で執り行われました。北は北海道から、南は九州から、予選を勝ち上がったファイナリスト5人が一同に介しました。決勝では予選と異なり、特殊な器具を用いて豚の心臓を拍動させ、吻合を一段階難しくした状況での手技となります。「心拍動下冠動脈バイパス術」の技術が問われます。

「若手の訓練のため」と、現在の主任教授である新田先生と准教授である石井先生が医局で購入してくれたBEAT(冠動脈吻合練習機械)で、私は予選を通過して以降、拍動する血管への吻合を飽きるほど繰り返しました。そんな私に、

新田先生・石井先生は実臨床でも様々な形でチャンスと指導を与えてくれました。同世代に負けない自信は、十分に持っていたと思います。

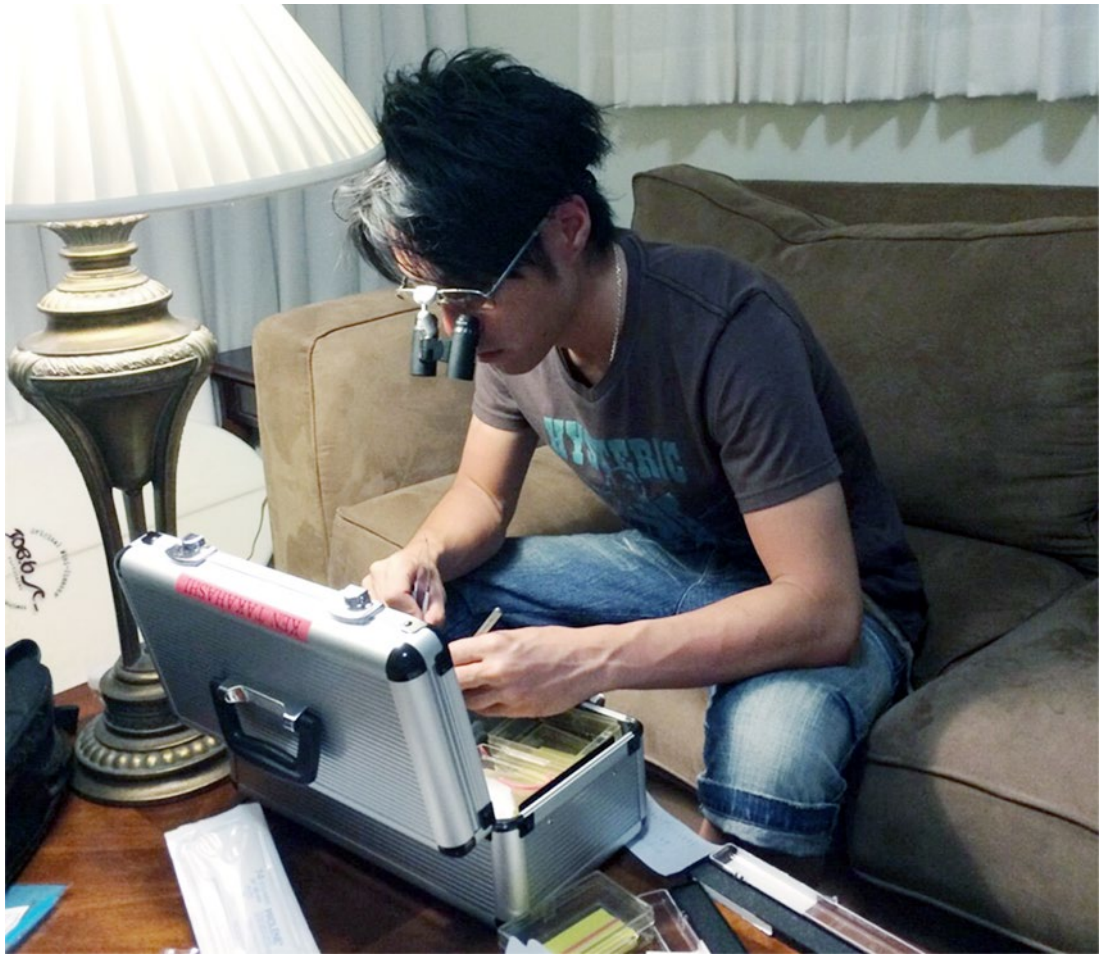
決勝はある意味、異様な空気でした。吻合をリアルタイムで別室のスクリーンへ写し、そこで審査員の先生方が手技について議論をするのですが、その内容が全てマイクを通じて術者側にも鮮明に聞こえてくるシステムになっていました。冠動脈外科領域の巨匠たちの目はごまかされません。「今の1針は少し甘かったね」など、容赦ないひとことが、まさに目下吻合中の術者に浴びせられます。

私の順番は3番目で、異様な空気で決勝が進んでいく会場の中、静かに自分の番を待ちました。「絶対に勝つ」という闘志と、「勝つために平常心を保つ」という冷静さが混在して、相反するふたつの意思が自分の頭を激しく揺さぶる感覚でした。

「高橋先生、始めてください」の合図がアナウンスされ、自分の手技を始めました。「ユニークな血管露出の仕方だね」「あの縫い方だとグラフトが内反するんじゃないかな」など、審査員の先生方の指摘が耳に入りましたが、迷いなくてきばきと進めていきました。針を血管に刺入する時も、把持した針を鑷子で跳ね上げる時も、私の思うように針と糸は動いてくれました。ミスなく、淀みなく自分の吻合が終わり、糸を切った瞬間に、助手を務めて下さった先生が微笑みかけてくれました。確かな手応えを感じた瞬間でした。

その後、別会場に移動し、表彰式がありました。結果は、菊名記念病院の奈良原先生と僕の同率優勝でした。奈良原先生は控え室で言葉を交わしたときは物腰の柔らかな印象でしたが、決勝直前からは張りつめていてかつ落ち着いた独特の雰囲気を感じ、ひとりオーラを放っていたように見えました。奈良原先生と私に賞状が授与され、チャレンジャーズライブ2014は幕を下ろしました。

今回のこの結果に、これまで指導して頂いた先生方から賛辞の言葉を頂戴しました。私からすると、外科医になって4年足らずの間、徹底的に基礎を作り上げてくれた先生方に心から感謝する出来事となりました。今回のチャレンジを忘れずに、これから長い外科医人生でもチャレンジし続けることを念頭に、トータルで質の高い外科医をイメージして全力で精進していこうと思います。



ハワイ旅行中も道具持参し練習



川崎南部病院、落先生との練習風景



決勝にて



表彰式にて

